

ドッグセラピープロジェクト in 子山ホーム

本プロジェクトは、児童養護施設（以後、施設）で暮らす子どもたちのためのドッグセラピーを学生と施設職員、NPO 団体、企業が共に創りあげるプロジェクトです。セラピーの実施と共に、様々な背景を持つ施設の子もたちと動物が触れ合うことで、子どもの心身にどのような変化があるのか。その影響についても調査(1 回分)しました。

児童養護施設でのドッグセラピーと調査

【目的】

- (1) 児童養護施設に入所する児童を対象とした、ドッグセラピーによる心理的側面と生理的側面への即時的な影響を明らかにする
- (2) NPO法人アニマルセラピーwithワンの方たちへのインタビューを通して活動について知る。

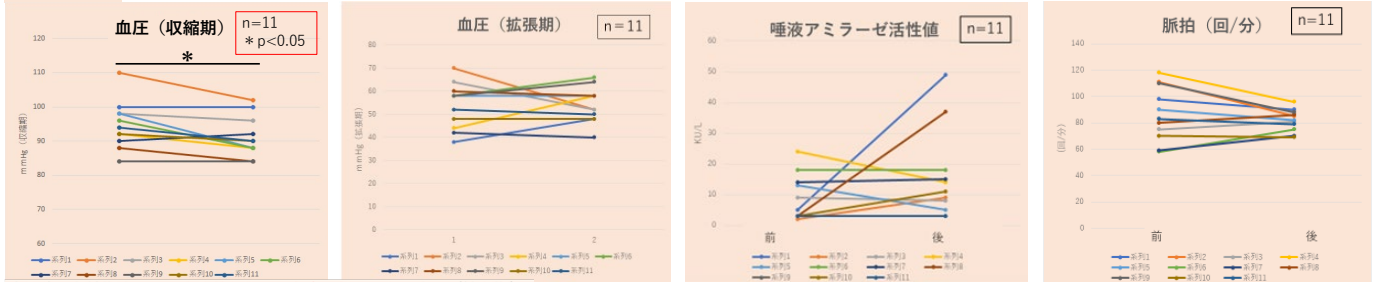
【調査方法】

対象者：対象者：施設長と知的能力障害やイヌへのアレルギーのない子どもの双方に、同意が得られた1~6年生の11名。
 方法：NPO法人 アニマルセラピーwithワンから派遣されたセラピードッグとの触れ合いを体験してもらい、セラピーの前後で値を測定した。
 分析方法：介入前後での各測定値の比較は、ウィルコクソンの符号付き順位検定を用いて分析し、優位水準は5%とした。

- <調査内容と流れ>
- ①簡易アンケートへの回答
 - ②表情撮影(15秒:FaceReader™)
 - ③表情シートから今の感情を選ぶ
 - ④唾液アミラーゼの採取と測定
 - ⑤脈拍・血圧測定
 - ⑥簡易アンケートへの回答



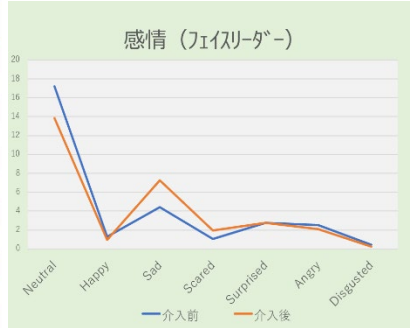
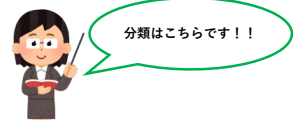
結果(1)



介入後の収縮期血圧は、介入前と比べて有意に低下した。血圧（拡張期）、唾液アミラーゼ活性値、脈拍は、介入前後で有意な差は見られなかった。

対象者	セラピー前 (表情シート)	グループ	セラピー後	グループ
1	18	A	18	A
2	20	C	19	A
3	14	A	2	A
4	14	A	14	A
5	14	A	5	A
6	8	A	8	A
7	8	A	19	A
8	2	A	1	C
9	1	C	5	A
10	19	A	19	A
11	18	A	18	A

- 表情シート (1~20番) までの中から、今の自分の感情に合うものを選択
- 怒り・不満・恐れ
 - 幸せ・うれしい
 - 悲しい・がっかり
 - その他のグループ



結果(2)

セラピストの方へのインタビューから

- ・コロナ禍での具体的な変化…利用者の年齢層の変化 (高齢者や障がい者との触れ合い中心→子供との触れ合いの場が増加)
- ・犬の適齢期…5歳~6歳
- ・セラピードッグとして活動できる時期…現在は生後8か月以上
- ・セラピードッグの引退…犬種、体調により様々
- ・トラブルが起きた事例…今のところはない



心に残った事例

・母親による依頼、自宅への個人訪問

姉妹2人、お姉ちゃんが難病で長期入院を余儀なくされ、家族もその子にかかりつきり。妹ちゃんは何かとの次になってしまい、さみしい思いをさせてしまっている…。犬が好きなので触れ合わせてあげたい。お姉ちゃんが入院している病院にはセラピードッグが来ているが個人宅には来てくれない…

妹ちゃんはもちろん、看病や心配から逃れられないお母さまにもホッとした癒しのお時間を過ごしてもらいたい。



今後の展望

都内のメンタルクリニックでの依頼
 依頼内容：うつ症状を訴えてくる患者様が多い別の新たな分野:高校の先生に向けての触れ合いの問い合わせもある

どのように触れ合うのが良いか、ご希望を聞きながら打ち合わせを重ね、患者様により良い効果が表れるよう努力したい。

企業セラピーを拡げたいと思っていますのでぜひ実現させたい。

明らかに「大変そう…かわいそう…」そういったところには支援が届きやすい。でも辛いのはその子だけではなく、家族全員が何かしらの犠牲を払い、我慢して生きている。人知れず我慢し心を痛めている方のごところにこそ伺いたい。



まとめ

・今回の調査では、生理的側面は、イヌとの触れ合いによる副交感神経の活性化の様子が見られた。心理的側面は、明確な癒しの結果には繋がらなかったが、犬との触れ合いへの期待感が高かったことや、先行研究の結果から子どもの感情表出が促された可能性が示唆された。

・ドッグセラピーは、疾患を患っている人に限らず、施設の子どものような心の傷つきやストレスを抱える人を対象とした病気にはたる前段階(予防)の活動としても、拡大しつつあると考えられた。

感想

・人間に対する犬のストレス度が、どう変化しているのかも調査してみたいと思った。また、今後のドッグセラピーの活動の拡大についても、注目していきたい。